二十八夏

きくし　并写

哥ニ詞を若ニ書

[V. 26]

PL788
.4
.G4
1654
vol.26
Asian
Japan
eage

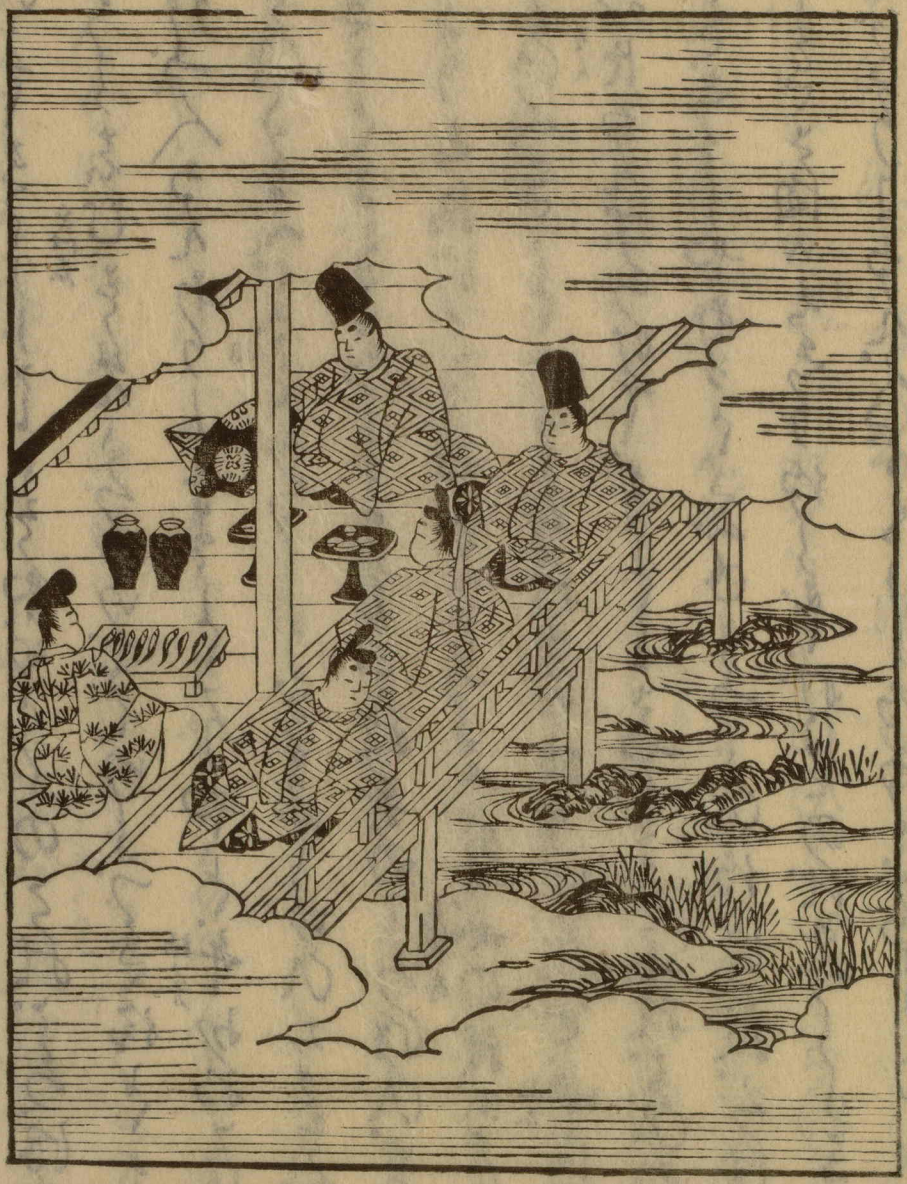
THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源氏卅六夕の六月のるゝ　六条院ノ
いとあつき日、ひんがしのつりどのにいでのて
すゞみ給、中ゆのさゝもさゝひ給、しるしき殿ゞ人
あまたさゝひて、よし川（桂河之）よりなれるあゆ、ちうき
川（賀茂河之）のいしがしやうのあれ、おまへまて奉うじて
まいらす、例のちゑのさんぶち（柏木ノ才之）、中ゆのれあるを
鶴にて奉りゐへり、さうぐしく（源詞）、ねふるかりける
おり、よくあれしゐへるかれとて、おほうきまいり、
ひ（水之）ぶめして、すいさんなどとりぐにさうどき
つくふ、風（北）いとよくふけども、日のどかにくもを
なき元の、よし日にちるほど、蝶のこゑなどもいと
くるしげにきゝあれば、水（源詞）のうへむとく（無源）なるをふの

あつかましさかれ。むしいのつゝいゆるされなんやと
て。よりかしまへり。いとかるころは。おそびなどもす
き。面じく。さすがにくらしがらきとそくるしかれ。
こやづかへするわきひとぐらへがらかんな。おび
ひもくとゐぬほどよ。こゝまてごゝに打こぶれ。この代
世にあらんことのすこし。然づらしく。ねふさく
めぬべからんこと。鍛(くろ)て罪をのへ。なまとなくおき
なびまゝる心ちして。をけんのこともおぼつかなしや
などのたまへど。めづらしきことして。うちいてきこ
えん抱がたりも。さらにいがしこまりたるやうまてこれ
いと涼しきかうらんに。せなるをしいてさかしひ給。

柏木ノ才弁ヲ物荻ノ法ノ心地ニ



いづくにてこしぞや、かしこのこれどころばう
ごしきむもんさうのいぞく、かしづき給ふさま
ねぶ人あんおりし、まことうやと、弁かねてり
とひさまへじ、ごとくしう、さまでいひ入まいらせ
こきこともさへござりう、これ其のころ給ひ、蔵
ござりあ給けりをば、のこさつへけり、女の我あん
くるひべきこと、おりとあみり外給りけりを、中ね
飢にあん男つけて、まことにさやうまをされどもひぬ
べきおうしや、おりこぶつひと給ひ給ければ、くは
しきさ後いとまり給へそげにこの比めづらしこ
せげうりにあんへでもし給ありやうのこと

あそびたはぶれそのかづらげそむかしわざなり　侍

されどこの世、まこと〔源氏〕おほかりとおぼえていと〔詞〕おほう

めづらしきものがたりども、ときゞゝせさせてこそ

源氏がかくつけさせ給ひしに、いとほしこそさや〔源ノ侍子ノもくかさと云之〕う

なる紫のうへも、ひとり出まほしく思ひけれど、君のりを

紫の上こそなれやかへん。宮にこそ聞ゆる。さてを

ましてたまれうことにはおほしうらうげなし

とくまうされおふめりし猶よ。そでこそうくすまのぬ

水まやどれる月はくもりなきやうなれてりお

らんと口くおぼしての給、〔夕〕中将〔地〕の君もくりしてく

のぞくことなれば、さしもまめならず、かね〔柏ノ井云之〕と夜結はとお

いとうしとおひたり。親臣や。さやうのおち葉を
ごまひろへ。べ。ひろさんの後のよまあらんハおなじ
かぎしまてなぐさめんまおぞうことゝあらんと。
ろうじ給やうや。かやうのことまてぞ。うちべもいと
よきれ中の。まゝりしよりさすがまひまあつまけ。
まいて中将をいたくもしこなめて。けびさせ給つ
らさ給。おぼしあまりて。なほねたしとも。もりまて
めへりしとおぼしを。なり。かうまて給まつけても。
女いの姫君をうきたらん時。あれづらもしからぬ
りさまても。まてさはぎなんもや。いとも。れまうく
しく。ひあるあつさまへる人まて。よきあしき

けぢめも。けざやかなまでもやし。又まてけちかろ
ひることも。人ことなるおとゞなれば。いかりもれ
しとおぼしたんとも。えしぬさ夜まで。この恵を
さし出たんに。えかろくはおぼさじかし。いとき
びしうもまてなしてんとおぼして。少つけゆく
風。いとすゞしくて。かへりうくつきへぐいたひ
たり。心やすくうちすゞまん。やうくかやうの中
りも。いとしられぬべきよもひてりもなすもてり
かりやとて。よしの恵につたりぬへぐ。恵ぐちこれ
れをくりに乗り給。こそかれ時のおぼくしたるに。おなじ
なとしぜなれぐ。なるとも。つきまへられぬる。

おとゞ娘(むす)をすゝしといでのへとて志のびてかね(柏ノ才達)
約束などゐてまうできたり。いとかけ里こ海ほし
げにもへるを。中(タ)ねのいとぢほうの人ありて。ゐて
こゑむぢんなりし。この人ぞ(かね伝達)にこれもふこゝろなき
なるしなをくもれきもとぐる。まどのうちなる
ほども。ほどにもたるがひて。ゆかしくおぼゆべか
なことなれば。この家のおぼし。うちくのくぐく
しき程よりは。いと世にすきてことくもうなん
いひもなすべかる。うたぐもれもめれど。さすがに
人のすきごといひよろんにつきなしかしくて
(むす)もれしのへど。いでうさやうなるん人のりしきこの。

あるさあさくともえんなど。さうぐしきまくは
ねがひたしを。ほいなんかなふ心ちしけななすど。
さくめさ字ら給。此（ひノ地）まへはえぐりがちしき前戒な
どもうへさせ給ひず。なぞしこのいろをさくのへ
ゑ。からのやまとれまをいとなつしをゆひな
して。さ記えぐれゑゆゑぐへいというじうえ田。皆
えちよりて心のまくはもおりたらぬを。あるぞ（源訂ひまの給へ）たひ
つゝやすしふいうそくどもなりな心もちねなども。
とりぐはつけてこそめやをそれ。右中（こゞさの柏）ねはおして
すうしたびまりて心たびうしげさまさるをていう
りぞをとづれきこゆや。たしこなくもなさし

きこえ給てあるじの君。中将の君いらくよ紀中将も。
まぎれておもしげなる夜めきあかりけり。中将といらへ
給ておほとゞはほいなけれ。まじりも抱かく。ふかく
しめつ中将は。おほ君ぐさすゞりて。へてあつきつま
とゝやとのゝまへば。きゝまめきなどいふひとも侍りつる
とゝアカゝ給ひ。いでそのれされまてもやされん夜は。
ねがはしうもあらず。さておもきなきどもむすびときこえん
こゝろもとけず。手ならへてなまめかしげのつ
らきあり。まだしらずしらあり。世のさまさへもろしと
おもはれば。きしはめかはまてこゝはものまねびて
らんまゝにきこゆめるをかしありあまりしやうなる。うめき

なふ。きは（彭ム）うゝ此心のへぐてあれ此中なりかりと。
ゑて始まと。おや（以）まさしれこそまつしんこと乃
いけとなる後。おそれまもいふとくも云て。月（比）もなき
ころなれば。とうろまな目となづらまいれり。おう（流河）後
そぢうくてあつかしやうゞ更とそよけれとて。
へめしてうゞ更のぶひとけどもなきまとめて。
おし（比）げなる目ぐんのあるを。ひさ（流ノ）しさよせなて。うさ
なしなへば。ゐ（彭ノ）ちまいとよそしくべられたり。
ねもいとよくなれば。すゝしひさなて。やう（流河）のことは
れ（彭ノ）ころまいしぬすぢまやと。月ごろせひおとし
和琴を秋ノ山出くし思ふきゑらうきとめんへ秋そはなし
まゝけるれ。秋の夜の月かげすゞしきほど

いとおくうくいあしぞ出の声まうさあるしあく
をうるほどけぢうしいまあしき拍の○やごとく（琴を云へ北六絃）
しきしらべもてあししどけるしやこの拍（和琴を云へ）まさあるがら
おほくのあそび拍の○ひやうしをとこの人とりうるあん
いとうしこさやまとごとくとうるうしきてこさいも
あくしをさうことあり ひろくことくれと後
しらぬ女のこめとあんおほゆりおあじくはこゝろ
とじめて おれあどまうきあそきてあしひうまん
あうさ心とて あまどうりもあらずあるじ又まことま
ひさうこというこさまやあらん こゝいまはこの門
のおほとゞーあずしふ人あしうし こゝこうあさ

おなじすがたのねはよろづのまれて孫こまり
ようひて、いふるまなくこそひくこれば生と
うたりぬべき。ほんのぐころえて、いかでとおぼすこと
なれど、いとゞいづくしうて、このけうりはさりぬべき
れあそびのおりなどは、さく侍りなんや。あやしき
山がけなどの中はまもぶまれあまるまぐること
なれば、をしなべて心やすくやとこそ思ふへつれ。
さはまぐれたりは、さ面ことはや侍らんとゆし
げは、さちは心いれて、しまへれど、さうしおびはと
こそ、ゑもこちくだりたるやうなれど、此前たゞ此
あそびはもまづ、ふんのつきぬまを、人のくはは

あしずりして尽れをみておやもいとかなしうなり
こそあはれなるその中にもおやとさるべき御よりも
ひとさとりのへんにこころよくあらんかし。
それまたとにもかくもありまに拙し給ひなんを。
このことをまでおしまずたどおもしろげなるかたなし
き琴をんこくやうらん。ものよりはいづれまさ
るらも心やすくずのことぞおあつかりともつおには
み給てんうしとそだしべすうしひとつ給ふとつ
いさめうけまめしうおもしうれしまさる廻さふ
ねやのぐらんとおやのれゆうしされさらそひて。
ためしとまてさんいたるん世ずまざそおりとけひき

給さんをきられるどもひおのうりぬきき河の臣ぶ乃
やさしきなど。うとなるしきうと給ふ。おやさか
つまは。すこしうちつひつけぎしをすずりうき
あさしかへるすず。これ待つひめしずおもしろう
こともいでのきかへざえいへよあんちぬよざ
あり。さうかれんぞうりこそ心のうちはもそ。かのふつうは
人へもありけめ。おまうてうれるれよひきあくを
さうらん。ふとも。きちまことしかへばさう。お中の
御まそ。ほのよ京人とあれ。てけり。あつお同ゐ
女のたしへこえしうれば。ひかしにまもやとり
ありそ。よかれ給ひず。まりしもひこと給ゐあん。こく

とらふまゝやと心をもとめあるこのれまとまよりて
ぞおもひねざりけりて。いけるもの風の吹そのてかう
いひちらさでとて折ふしつきなくるさ海。ほりげる
野そらの月なけるりかうへひあそ。さくかくかくれぬ人
のくあまた。あまりしむ風も吹そよふしとてなかし
やア給いとゝ心やまし。人ぐちさまふしきなど。御乃
くまつれどとも見えし給えぞあそしきをおぞも
此人ぐのきちさりぬうれ。いつぞ切とも又もとこの
茶ぞのこまをはまん。世もいとつれなきさとやす。
いはゞ人も拙の門とぞまかりをしむるかりしも。
いふを哉ふるぞ切ゆふそずなしの給いぞ

ちりはもいとあはれなり

（源）なぞしこのとこなりしき女（以ノ）とこばもとの
（夕顔と云）うきのを人やうぐのまこ（詞）このことのまづしりしさま
とそれもどもりも心ぐるしうせひ（きこ）罕ゆれとの給
（ロ）ちこうちなきて

（ロ）山がけのきれはおひしなぞしこのもとの
孫ぞしをこれかうぐのん（比）ちりはけはさてしなり給
へるさ海げはいとなりしうけりやかなりこ（源）
ぞしましかばとうちどむじなて いとぐしき
れこそかくしきまで れえ志のびきつまじう
おぼさりけりのふことも おまりうちきり人志

ミなりとがめいべきほどハこころのまゝなりし
とゞめて、さるべきことをし出つ、れふミのうまを
ぬありなし、こゝこのれことのミ、あけられ法
こころまゝなりなぞ(涼ぐ)くあいなきわざをして、
やすらぬ抱せひをすらん、さしもしとて、こころの
まゝまもあらば、世の人のそしりいかんことのかゝ
がろしさ紙、まゞさめいさる抱まて、人のれこれ
いとおしうなべし、かぎりなきれこころざしと
いふとも、其の(雲)人のれおぼしまゝらぶぞうりを
紙こころながらえあるまじくおぼししりうり、
さてそのおとりのつらまてハ、何ぞうりかハあらん

ひが男ひとりこそひとよりはことなれ。こん人をも
あまるるが中にうらづらかんすゑまでは。何乃ぬぼと
うはさけうらん。ことなりことなき納言(なうごん)のきはの。
ふる心なくてもちんにはをとりぬべきことぞと。
こづしぬぼしもりに。いとくおしうて。(宣)こゝや
ちぶ(ひげづら)ちまどるやゆりしてまし。さてまてもなれ
いざなひとりてはもひこしなんや。いふかひなき
まてもさもしそんとぬぼしおりもありされど
けたりなてかうちをこなふ。今はかことをしん
なふにさへことつけてちりやうなれよるに語。
姫(むこ)ぞもちじめこそひくつけくうらて見て語しが

くてもなぐらうまうしろめくされこころハなより
かりとやうくめなれていとしもうとこそこそ
結ばさるべきれいらへもなれくしかしぬほど
まさそしかしなどしなて（深ノ心を）こうまくりあい
ぎやうつきかほりまさりぬへれバなほさてもえ
すぐすまじくそしかへさうさてまささてこくなが
らかしづきすへてさるべきありくまさるくうち
悪び地をも罪なぐさゝなんやかくまる世なれぬ程
のまづらしさそこころぐしうハあるなれ
どのづらしきもりつくとも地の心をしりそめ
いとおしきまひなくて ぐこころもしひいりなど

しげくともさりしかしとおぼしようも。いと
なしかしぬれそろちりや。いよくそろやまかしず。
むけてんもろしかしん。おれめまさひすぐさん
ことの。とき夜かうざ夜まうきぞ。よげかぞむつ
りしきれかたしひちりけり。内(比)のおほ(ほ)いとのれこの
いまのれむすめ(手ほ志)ことと。夜(ほ)の人をゆりさずかう先
いひ。世まもほきうちことゝそしりいふと。実語に。お拘(拍ノ才)の
ことのけいでに。おほきおとゞ(源)のさうことやさゝひさま
ひしことかたり。実しかれば。けしひ(ほノ)まて。さうし(河)おしこま
こそは。年ごろととまも。実しぬ。山がけの子(むくう)せうん
出て。まれめしこうれ。おさく人のうへまどき語かぬ

おとゞ（ほ）共。このまゝのことはこゝとゞめてそ。
おとしめ給や。これまぞおぼしあるこゝちし
けるとの給。お（柏ノ才）ねかれましの基まほへ多人（び）を。
いとこともあきけるひこゝもあらまゝなん給る。
（法）共のこやなど。いろう心とゞめての給ひづしふ
とか。おぼろけまはあらじとなん。人ぐとしもあら
約めるとゆへいで（以汀）それもかれおとゞ（ほ）の御
すめとおもふぞうのおぼしのいというじこそ。
人のころこれされこそあるせなめれ。なるしず
さしもしぐれ給ひじ。人ぐしきほどなるしば。年ば
もしらましおとゞ（ほ）のちりもつゞ。この世を

すぐさめへるれ身のおぼしありさ後まおもぐしき
くらまむすめうしづきて げまさずちゅうんと心
やつとめでこさが抱き給ひ○バおほうて子のすくを
なくて心もとなきちゅりうしをとりぢらちゅれど
あしのおもとれうえ出さうへしもさう世うり
なきすくをまて あるやうあんとおぼゆしその
いま姫(む)だ ハようをずは だちのれこまもあらじうし
さすがまいとかしきあり所にいきまへる人まて
もてなの給ちゅんと いひおとし給さていかに
さぶめらるゆ 見(量)こしそまにいりし給ひん もと
ちりとりつきてれちゅうもよし へがらもがうさく

なりけれあそひなんかしとの給てはおを娘（雲ゐ）恵志れ
ことおんぞ口おしくかやうにこころにくもてな
しているに志れさんとやすらぎいぶかしがら
せましもれをとねるそれがくらゐ（タノ）さぞらりと
こゝざらんかぎりはゆかしがらくおぼしてありなり
おとゞ（源地）もねんぢにくちいれへさの給たゞこそは
まくるやうにてもなびあとおぼすをおとゝ（シタ）がる
ちゝ更にいられ給ぬぞこころやましくなんとかく（ねん）
おぼしめぐらすまゝにゆくり（地）もなくかろらかに
たひつゝりぬへり（以雲ゐへ）おねもれともに乗り給娘（雲ゐ）恵は
いくましめへるほどなりう須もれてひとへを

きぬて。ふしぬへるさ夜。あつかましくはこえぞ。
いとらうたげにさぐやかなり。すきたるたぐつきも。
いとうけくし。おりしげなるもつきして。扇を
もたまへ置けるなどしかひなを捲まて。うちやられ
たるれぐしのいとながくこちたくはあるほどいと
かりしきすゑつきなり。人ぐも袖のうしろにより
こしつて。けやすそこれだ。ふとともおどろい給はず。
あふぎ紙なしぬへれだ。なるごろもなく。ん
あげたまへるまゝらうたげにて。つゝつきのあう
めるもおやの御めにはいとうけくしうこ也

[illegible]
れはいさあ望ゆるまれをおどかいとまれたるなこ
さ庵にてはお国とれごまりけるひとぐもちく
ぎつらもでおやしや女は男をつゐにころづひ
してまもりたんなんあるべき心やすくうち雅
たるさ庵にもてなしたるは志れなきつぎなりさり
とていとさしく男をめてぶどうのぐらに
よこぬんけくりてねたんもまくしうけく志
人にもあまりけどをく。まれへぐそがましきなど。
けるうきやうとても人にくる心うつくしうはあしぬに
ぎなり。お国さ[源]おとぐの。君が[illegible]の姫[以下]君ちなりし語なる
をしへはよろづのことにかよりしなぐらめてかどく

しきゆへもつけじ。こどくしくおぼゆることもあらせ
じと。ぬるしうまこそをきて給なれ。げにさもあることな
なれど。人をして心にもすゐつぎにも。こそくなびくなる
もうことあるまれなれば。おひ出給さ夜あらんかし。この志
の人となり。宮づかへにいざしこそ給へ。世のそしきこ
そいとゆしかれなどの給て。しゐやうにまゐらんと
しひしすぢいかゝきやうになりにたる所なれど。
いかで人ワらはれなんず。しるしまゐらんとなん。人のう
へのさ夜ぐなるを罪ごとに。しひこゝぞれ給り。心こゝとに
ねんごろがん人のねきごとにおしげしなびき給そ。しゐ
さ夜給るなど。いとらうしとしつゝ罪の給。昔いなまず

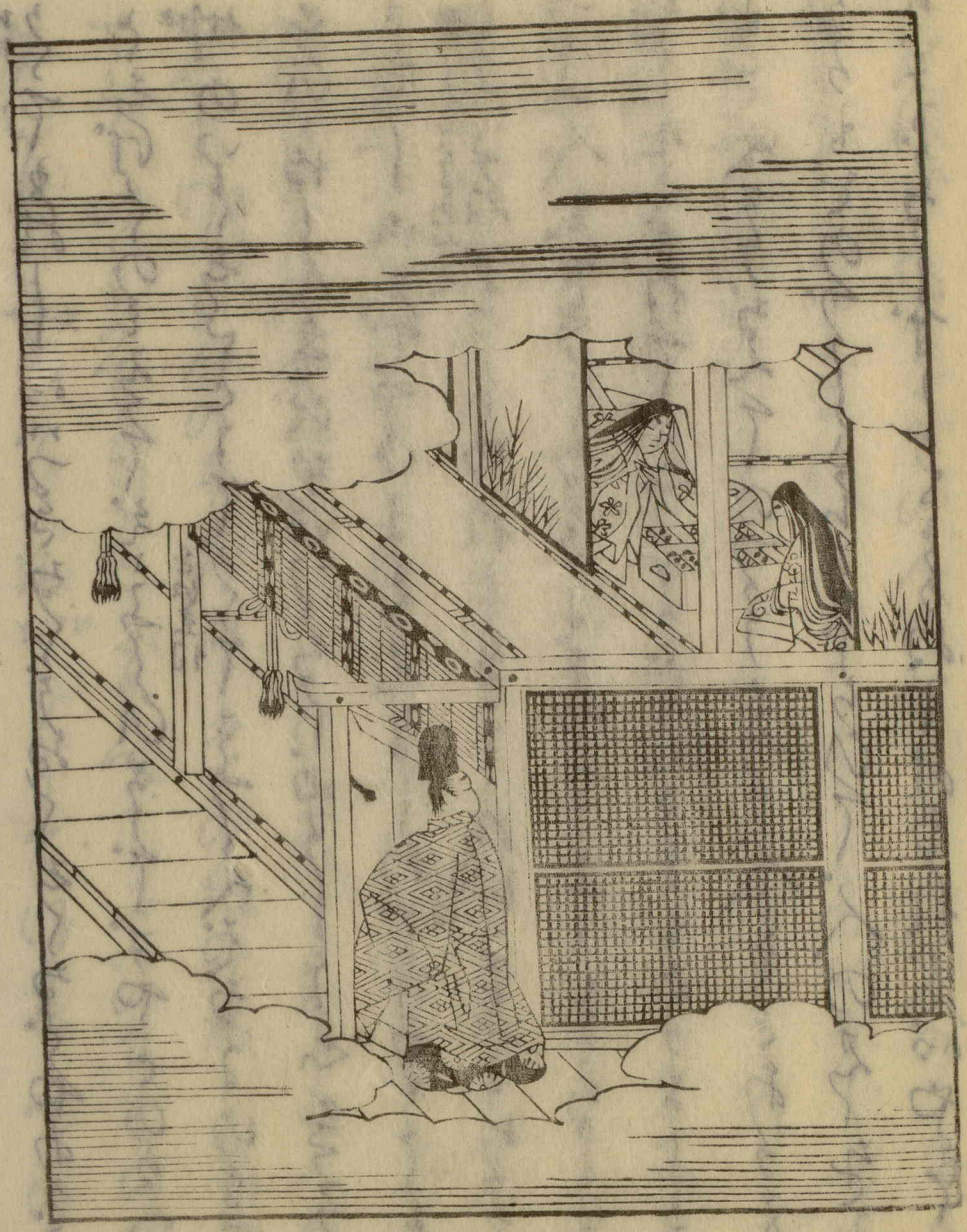
ノ十五

をもおろうさひしうでなりくさしあるりて、いと
おしかりしくとのさはぎるもおもなくてこえ
なりけるよと、今ぞさひ出るもむかしさがりて、いとゞ
うちづしき、おほ家よりもつゐるおぼつるまさこと紙
恨寄しぬへど、かくのみふかがつくましうて、えつゝ見
えしなり給ひず、おさゞこの小の墓のいまだ(そのまゝ)を、いかり
なんさるしるしむかへゐてきて、ひとりそしるとてか
へしをくらんもいとかぐしく、地ぐるおしきやうなり、
かくてこゝをきこえれば、まことなりしづくべき心あるかと、
人のいひなすなるもねたし、女(こきゞん)のれるなるどなり
よどらいまて、さるおこのもれはしれいてん、ひとの

いとうるはしきものは、いひおとすなりうちもらさ、いと
さいふぢりはやはあるなどおぼして、女(こきでん)の君は、
(狩)れ人(長恵)まいりきん、そぐるしからんことなどは、おい
たしへる女房などして、めくまずをしへさせ
おてゆらんぞよ、つきひとぐのことくさてりは、
なりしもを給そ、うらてあはつけきやうなりと、けら
ひつきそしぬふ、などかいとさことくの外には給らん、
(柏)中将などのいとはなくしひ給りかんかのことは、
さえぞといふぢりはこそ給し給へ、(狩)くのおひ
さちぐをおしたるくしたるくはも、うらへもうや
しきりやと、いとちづしげはきてし給、(狩)ふれ

さ庭(こきでんくす)はこまうまおかしげまはなくて、いとあてま
まてこゝろ抱のなつしきさ庭そひて、面白き梅志
芸のひらけさしたる、あさぼらけ見えて、のこりおほ
かり、げに風ゝ忘れぬるぞ人まことなりけると、こ
なり給、中将(こきでん)のさ(柏ノ事)はいへど、こゝろつきさどりのすく
なきなりなど、給も、いと(地)おしげなる人のれおぼし
かれ、やがて(以)けれる(手口志)のさよりまこゝずまおりして
のぞきのへれば、すぐれたるくをしたりて、又(訛ともこれぞ)きち
のきこゝとて、ざれたる口ゝ人のあるなと、すぐろく
うち給て(手口志ノ)をいときちまをしもえて、(詞)きうさいきう
さいといふこゝぞ、いと(以心)しるゞどきや、あれ(以心)うたてと

あげしてはとものの人のささをふともてかきせいし
まてゐ紙にまどれはそめるかるまさうじのかき
あひたるをこいれ給。この人もちる氣色ちやまゐ
はゑしやくとどうをひねりつゝとんまもおあぐ
中にちひはありやすらんいとあまへたるさ海ども
しかりかたちはひぢぐるさすがるあいぞやう
つきたるかるまてかこうりしうにかろげたする
とひさいのいとちかやかるうとこゑのあはにに
さとまそこなられたるなりさりそくよしとは
なけれどこと人とあしがふべくもあしぐかぐこゑ
ちひあもきられ給まいとすくをうろづさらし



（以行）
くてもれし給いつきなく。うねくしくなどやあり。こ
としげくのゝまゝて。えとふしひまうでずやとのゝへが。
（地）例のいとしるどまてうくてさふしへだ。なまのもの
（毛以志行）
しひゝ給しん年ばおばつなく。ゆりしうしゝ。こゝて
させしれゝか。つゝまえ見なしぬだゝるまこそ。
（双ニこゝあきてうさぬんとく）
ゝうゝぬ心ちし給れとさて給げ（以行）ま方まちゝう
つふ人もおさくなさゝ。さやうまてもこなし
なしんとゝかれてはしゝかど。えさしもあゝまじ。さ
ほざ此なりなんてのつうまつり人こそとあゝこ
うゝもをのづゝしゝちまじらひて。人の見てをも
ゝどもゝなしずしもとめぬもれなれど。心やさく

べかれ。それぞるその人のむすめ。かれ人のこなど
しらしきはなれば。おやもしらしのおもてぶせ
なるぬぐひおほかあり。ましてとの給さしける。此
氣色のもづしきもしらず。何かそはことくしく
しめんて。まじらひ侍しぞこそところせかし。先
おほゝおほつぼとりまもつかうまつりなんと思へ
こまへば。えねんじ夜もでけりひめてまけ
かしりしぬやくなくつまかく玉さかりあんな
おやは。けうぎんのこころあしが。この地の給こゝ思を。
すそしのどめてきりをこまへさしばいのちものび
なんかしと。をこめき給おとゞまて。ほくしての給

しるのかどよこそへ侍しめ。おさなく侍し時ぞよ。
こ母のつねよろしがりをしへ侍し。妙法寺志
べうだとこの。うぶやに侍りけり。おへもれとなん
歌侍給へし。いでこのしるどさやめ侍らんと。志
さけぎたるも。いとけりのうろゆく。衣なりとこ給。
そのけぢくいりたちたりかんだとこそ。河づき
なりかれ。たゞそのつゝのむくひなるもせしこと。
どもりこそ。たそうそしりたるつゝよも。かぞへためう
しとのなて。こながらもげしげよおもすな
れさ夜に。えしなんこそたづしけれ。いりけ
さゞめて。くあやしきけひもたるもぞ。まくん

ようをけんとおぼし。人ぐもおまるこうぎ。いひちら
さんことさ。おもひかへし給物から。女れの里より
もれし給ころ。時ぐ内より来りて。ひとのかりさ海
などもこゝろれぬへし。ことちらことなき人も。
をのづし人にまじらひ。さうかるにあれば。さても
ありぬし。さうこゝろしてこそ。まり給なんやと
のたまへば。いとうれしきことにこそ侍りなれ。ただ
いかでもく。れるぐりかずまへられなんん
ことをなん。わてもさめても。さしごろなるごと紙
ちひぬへつるにもおしぎ。れゆるしごと侍しが。私を
ちこいろごきても。つうまつりなんと。いとよげる

いますこしさえづれば、いふかひなしとおぼして、
いとしかおりたちて、こしきぐひろひ給ひぞとも来り
給なん。こゞかれあへもれましけん。法の師ぞ母は
とをくいと、ぞこごとりの給なすなどもしらず。
おなじきぐだとさらせり中にもいとさらばる
抽くしく。菜やかなりと思して、おぼろ望志
へ云しにくきれしきをもこしらず。さていかが
女れどれへ来り給へんと望ゆれば、よろしき
日などやいつべからん。よしことくしくは何かは。
あもとこゝられば、かふまてもとの給すてくつくり給ぬ。
よき四位の位たちのいつき望れてうちこぼろき給

まもいといかしきれいきほひなりを。見をくる
きてして。いで（をは志詞）あれめでこれけがれおやく。かりなる
これなりしおやしきこ家なおひ出けることく
のくまへが。又きち。あまり（あせち詞）ことくしう。ちづしげ
まぞおもすう。よろしきおやのおもひうしげん
まぞこゞれ出られ給はましといふも。まりなしや。
れいの（をは志詞）志の。人のいふとやぶり給。いで先ぞ返し。
いまはひとろくちることぞなまぎられそ。あるやう
あるべき身まこそあめれと。（地）たしぶち給ふほけき。
けぢうしあいぎやうつきて。うちとけそぼれこゝは。
さりとるおりしうつゝゆかされこゝも。多ぐいと

ひなびあやしきしも人の中におひ出ぬへれど。
抱いふさ面もしらず。こゝなるゆへなきこゝ紫をも。
のどやかにをしたげめて。いひいづしたるを。う
ちきくこゝふとに覚え。おしかしぬ哥がたりを
するも。こゝろづかひつきぐしくて。のたり思ふを。
もとすゑおしこゝろさ面にうちずじたるを。
ふるきすぢおぼゆぬほどれうちきくにいおしか
なりと。こゝもとまかり。心ふくよしあること紙
いひぬたりとも。よろしきこゝちあらんとも思ひず。
あはつけきこはざ面にの給いづることば。こはく
しくことばざこそ。我まくにほうりなしひたる。

めれとのかところにあらひたるさ海にもてあるし。
いとあやしきにやけるくありけり。いといふかひ
なくはあらず。そそもじあまり。もとすゑあはぬ哥。
うちこくうちつぐけあどし給。さて女れ愛り
まいれとのるまへるを。しぶくあるさ海あるらは。抽
しうもしそおぼをよきりまうでん。おとぐのきこ。天
下におぼすとも。このれうるぐの。すけあうもて
あし給はんには。愛のうちにそそりあんやとの給
れ地おほくのほどくろしかありや。まづれ文を書給
おしがきのまぢかきほどにはさふらひあがら。いま
まぞ入げかむぢりのしるしも給らぬは。あるそのの

関(せき)とやすへさき給つらんとなん。しらねどもむさし
野といへがしこかれど。あなかしこくやとて
むがちまてうしらはまことやくれまもまいり
えんとしたまへたつはいとふまもゆるまや詩もん。
いでやくあやしきまもこれを川まをとて。まる
もしまかくぞ

草(手江)ワクミひたちのうしのいかぐさきいかぞ
あひえん女この浦浜。河(地)ほかはあのと河をさきしさし
ひとかさひまいとさうがちまいかれってのそ乃
すぢともこしぞ。たぐよひたるかさぶ夜も。しもしじ
ながまつりなくよしげえたり。くぐりの目どち

ざいはすぢにてまうれぬべくしゆうとうちうゑに
つくして、ぎすゞはりとほく、ちりくまきむすび
て。ちぎりしこの家はつけうら。ひと家しまりけく
しも。ゆとあはれてきよげなり。いゑはいうちなりけり
女院（こうきでん）の院りくてのぞいさんどころつありまして。ごうき
まいらせへとい。しも（こうきでんノ）ひんへうしまして。院よ
こそりいろ。ゐの御はさふしふなるともおすゑなる
とて。さりよの家といふ人まで気りて。ひさとなくて院
（こうきでんノ女だう）らんぎさ守。女院（こうきでん）ほく思ひてお女房の人家を。
中納言（こうきでんノ女だう）の家といふ。うらちうさうひてそぞしく
もなり。（中納言ノ詞）いまゐらしくさ院文の気色はよもゆかれと。

ゆしげまされば、さうしのまじもうらしられば
まやあらん。もとすゑなくもゝゆかれとてなへり。遊
るかくゆへくしらしぶいかろしとやまひおと
されなんやとて、うきなへとゆづり給。地 まて出てこそ
あらね。つきへぐい物おしうて、これうちつらひぬ
れ返りこへぞ。中御千宗詞 おしきとのすぢまのゝまつりれ
て詩めれば、まてしさせまくとそ。きんじがきめさ
ていとおしからんとて、こゝぞ此ふゝめさてかく。
ちかき 多詞 しらしなき。おぼつかなきいうしめしく
中御言宗 ひくちなるすがれうこのすまの海まなゝ
こちいでよもてぞきの松とかきて、よゝこさしれば

あれうえて。まことよ。こづしのよもこそいひちを
とかゝはしいるげよ。おぼひこれば。それはきん人
けきまへ。侍りちんとて。おしつゝそいぶし。つれ
りゝえて。おしのれくちつきや。まつとのあへるを
とて。いとあまへゝろこきものゝを色こゝきしめ
ねこまへり。蔵よといふもれいとあしゝりよい
つけてかゝをづりつゝろひこまへる。さゝりゝりよ
ぶはしうおいぶやうつきゝり。れ對面のほどさ
しすぐいゝろとゝもあんゝし

69038
6 AP78